

2016年(平成28年)度

梅光学院中学校・高等学校

学校評価書

梅光学院中学校・高等学校

平成28年度 梅光学院中学校・高等学校 学校評価書 校長(近藤 泰雄)

1 学校教育目標

昨年度の評価と課題に基づき、「変わらない建学の精神、変わる梅光」をキヤッチフレーズにさらに学校改革を推進する。特に中学・高校の生徒募集を第一義にし、「選ばれる学校づくり」の観点より、授業のあり方、クラス、学年指導、各校務分掌で、目標設定し全校の教師で取り組んでいく。

2 現状分析(前年度の評価と課題を踏まえて)

3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題

昨年度の評価と課題に基づき、「変わらない建学の精神、変わる梅光」をキヤッちフレーズにさらに学校改革を推進する。特に中学・高校の生徒募集を第一義にし、「選ばれる学校づくり」の観点より、授業のあり方、クラス、学年指導、各校務分掌で、目標設定し全校の教師で取り組んでいく。

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 中学1年 |
| 責任者名 | 河野優子 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|--------------|---|--|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 中1 | 基本的生活習慣の確立 | <ul style="list-style-type: none"> ・明るく元気な挨拶の徹底 ・無遅刻、予鈴着席の徹底 ・提出物の期限厳守 | <ul style="list-style-type: none"> ・校内での挨拶がいつもできる ・出席率100%を目指す ・提出物の遅れを出さないように管理、声掛けをする | A | A | 欠席の追跡調査、保護者との協働が功を奏した。提出物は諸段階から周感づけることで生活習慣といて定着したと思う |
| | 学習習慣・家庭学習の確立 | <ul style="list-style-type: none"> ・予習・授業・復習の学習サイクル習慣化 ・朝読書の徹底 | <ul style="list-style-type: none"> ・テスト計画表やCLASSIでのフォローアップを行う ・学級での啓発 | A | A | 成績に対する意識付けができ、向上心がクラス全員に生まれた |
| | 家庭との連携強化 | <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導・生徒指導を問わず、学校と家庭が協力して指導する意識の高揚 ・学年便りの充実 | <ul style="list-style-type: none"> ・保護者と連絡を密にし、情報の共有と協力して支援する態勢を作る ・学年便りを毎月出す | A | A | 教育相談・生徒指導部とも協力して生徒の生活支援に尽力することができた。その情報の発信としての学年便りは毎月欠かさず出した |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 中学2年 |
| 責任者名 | 能野則之 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|---------------|---|---|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 中2 | 基本的生活習慣の確立 | ○自ら挨拶ができるようになる。 ○授業時に着席して授業を開始できるようにする。 ○服装やみだしなみを整えることができる。 | A; 90%の生徒が概ね達成できている B; 70%の生徒が概ね達成できている C; 50%の生徒は達成できている | A | A | 基本的な生活習慣が安定したことで、学年全体に落ち着きが見られ、好ましい人間関係が作られている。 |
| | 学習習慣・家庭学習の充実 | ○積極的に、授業に取り組むことができる。 ○家庭学習で、予習・復習の習慣を身につけさせる。 | 定期支店の計画表を元に判断 A; 90%の生徒が自分の立てた学習計画を概ね実行できている B; 70%の生徒が自分の立てた学習計画を概ね実行できている C; 50%の生徒は自分の立てた学習計画を概ね実行できてい | B | B | 自己学習のやり方が定着しておらず、その結果、効果的な家庭学習が実行できていない。ノートの丸付け程度の安易な学習で満足している生徒が相当数おり、教科ごとに学習の仕方を指導することが今後の課題といえる。 |
| | 自ら考える力と社会性の育成 | ○自分で考えて行動する力を身につけさせる。 ○社会に目を向けさせ、職業意識を育てる。 ○人とのかかわりを考える力を育てる。 | A; 90%の生徒がクラス集団の中で望ましい人間関係を築くことができ、かつ職場体験学習に意欲的に取り組めた B; 70%の生徒がクラス集団の中で望ましい人間関係を築くことができ、かつ職場体験学習に意欲的に取り組めた生徒が概ね達成できている C; 50%の生徒はクラス集団 | A | A | 学年集団の中で、教師が指示する場をなるべく控え、自ら考え行動する場面を多くとることで、自主的に全体のことを考え行動できる生徒が増えた。また、職場体験学習は不登校傾向の生徒を除き、すべての生徒が意欲的に取り組み大きな成果を上げることができた。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 中学3年 |
| 責任者名 | 坂本博一 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|----------------|---|--|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 中3 | 社会生活の基礎を育てる | 時間・期限の厳守などの規範意識の育成 行事を通した協調性の育成 他者を思いやる感受性、手をさしのべる積極性の育成 | 目標以上の成果を上げた場合はAとする。 目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | A | B | 2学期に遅刻が多くなったが、3学期に改善された。移動教室へ遅れないよう注意した。自分の行動が他の生徒の迷惑にならないかを考えさせ、ある程度、意識させることができるようになった。 |
| | 学習習慣・家庭学習習慣の発展 | 授業や宿題への取り組みを通した基本的な学習姿勢の育成 高校への進学指導を通じた自主的な学習態度の確立 学習の自己分析・自己管理する力の育成 | 目標以上の成果を上げた場合はAとする。 目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | A | B | 教科担当の先生の指導もあって課題の提出や授業態度に改善が見られた。特に11月以降、高校進学を意識して学習する生徒の姿が、スタンダードクラスでも見られるようになった。 |
| | グローバルな視野の育成 | 国際社会に目を向けた探究の活動 海外研修を通して、国際社会の一員としての自覚の育成 | 目標以上の成果を上げた場合はAとする。 目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | A | A | 探究授業での調べ学習と、クラス・学年発表をとおして、外国と日本との違いを意識し、異文化理解の基礎を築くことができた。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 高校Ⅰ年 |
| 責任者名 | 林 久代 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|-----------------------|--|---|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 高Ⅰ | 高校生としての生活習慣を確立と自立を促す。 | * タブレットにより、起床・帰宅・就寝を記録させる。 * 遅刻・欠席ゼロを推進する。 * 学校行事への理解を図り、参加・協力する姿勢を養う。 | A 目標以上の成果を上げた。 B 目標に見合う成果を上げた。 C 目標に見合う成果に及ばなかった。 | B | B | タブレットによる生活習慣の管理はクラスによりまちまちであった。遅刻・欠席に関しては例年より少なくなり、不登校だった生徒も学校にこられるようになるなど、改善が見られた。学校行事に関してはチームノ瀬を結成し、積極的に参加できる生徒も増え、リーダーシップを発揮する生徒も出てきた。 |
| | 家庭学習の時間を確保させ | * タブレットで学習時間を記録させる。 * 授業には予習・復習をしてのぞむ習慣をつけさせる。 * 模試の活用 | A 目標以上の成果を上げた。 B 目標に見合う成果を上げた。 C 目標に見合う成果に及ばなかった。 | B | B | タブレットでの学習時間管理がクラス・個人によりまちまちとなってしまったところが反省点であるが、学習に対しては例年なく意欲が高かった。各担任も模試を意識しHRでの学習への意識付けも毎日行った。その結果αクラスを希望する生徒も増え、学習に対する意欲も高まった。 |
| | 進路に向けて自分の適性を摸索させる。 | * 進路ガイダンスを利用する。 * オープンスクールへの参加を勧める。 * 文理選択を慎重に考えさせる。 | A 目標以上の成果を上げた。 B 目標に見合う成果を上げた。 C 目標に見合う成果に及ばなかった。 | A | A | 進路ガイダンスの実施、OSへの参加、文理選択などに関しても全て高い意識で参加させることができた。各イベントの参加者も例年よりふえ、夢ナビに関しては次年度全員参加が決定したり、山口大学に全員学校説明会に参加させるなど、進路に対して高い意識を持たせることができた。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 高校Ⅱ年 |
| 責任者名 | 中塚聖治 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|---------------------------|---|--|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 高Ⅱ | 基本的生活習慣の見直しと自立意識の育成。 | <ul style="list-style-type: none"> ・遅刻、欠席を減らす指導を強化する。 ・学校行事に積極的に関わる姿勢を育成する。 ・学校行事や修学旅行の学びを通して、クラス・学年としての連帯感を育成する。 | <p>A 目標以上の成果を上げた。 B 目標に見合う成果を上げた。 C 目標に見合う成果に及ばなかった。</p> | B | B | 元々遅刻欠席が多い学年であるが、少しずつ改善の兆しが見られるようになった。修学旅行、梅光祭、その他の行事へ積極的に参加している、クラスでの連帯を深めることができた。また、クラスだけでなく学年としての意識も高めることができた。 |
| | 家庭学習の質を深め、予習・復習にプラスαを持たせる | <ul style="list-style-type: none"> ・提出物の徹底を図る。 ・タブレットの活用により健康観察と学習の記録の入力を徹底させる。 ・スタディサポートや模試を活用し、進路意識を高めて家庭学習の質を高める。 | <p>A 目標以上の成果を上げた。 B 目標に見合う成果を上げた。 C 目標に見合う成果に及ばなかった。</p> | B | B | 十分とはいえないが、タブレットの活用により自己管理の意識を高めることができた。また、スタディーサポートや模擬試験の活用により、学習への意識付けを行うとともに、自己理解を高めることができた。家庭学習の質をさらに高めていくことが今後の課題である。 |
| | 適性に応じた進路先を決定する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・進路の具体的なイメージを確立するための生徒自身の主体的な活動を導く ・進路指導室や各学校のHPを利用し、情報収集を活発化する。 ・オープンスクールへの参加を促し、進路実現をより具体化する。 | <p>A 目標以上の成果を上げた。 B 目標に見合う成果を上げた。 C 目標に見合う成果に及ばなかった。</p> | B | B | 学期に一度進路希望調査を行い、進路意識を高めるとともに、進路実現に向けてのアドバイスを行った。探究やLHR、模擬試験の活用により、自己理解を深めるとともに、情報収集を行いオープンスクールへの参加を促した。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|-------|
| 部門名 | 高校Ⅲ年 |
| 責任者名 | 一ノ瀬俊三 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|---------------------|----------------------------|--|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 高Ⅲ | 最終学年としての自覚を持たせる | 学校行事において、リーダーとしての役割を担う人材育成 | A リーダーとして十分に学校を統率する役割ができた B 学校行事に中心となって取り組めた C リーダーとしての役割を担えなかった | B | B | 各学校行事において、中心となって活動することはできた。また、クリスマス礼拝など梅光の伝統ある行事に関してもしっかりと引き継ぎ、下級生へのよい手本にはなったと思うが、全体のリーダーシップを十分に発揮したとまではいえなかつた。 |
| | 進路に向けた個別の発展的な学習を目指す | 受験勉強の充実と模擬試験の活用 | A 受験勉強に十分に取り組み、進学実績につながった B 受験勉強によく取り組んだ C 十分に取り組めなかつた | A | A | 午後8時までの自習時間延長により、多くの生徒が互いを意識しながら受験勉強に取り組めた。また、英検受験者・合格者の増加など、数値としても目に見えるものがあった。模擬試験多くの生徒が受験し、進学実績につながつたと考えられる。 |
| | 各自の進路を実現させる | 納得して受験し、達成感を持って卒業する準備をさせる。 | A 例年と比較してよい進学実績であった B 例年並みの進学実績であった C 例年以下の実績であった | A | A | 国公立に関しては例年並みであったが、特に難関私学に関してはよい結果となつた。また、不合格者も多く出たものの、AO入試にも多くチャレンジした。学年としても全体の希望校を学年団全員が把握し、学年全体で進路指導を行うことができた。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|-----|
| 部門名 | 教務 |
| 責任者名 | 林 武 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|----------------|---|--|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 教務 | ○家庭学習の習慣化 | ○家庭での学習時間、平日・週末の使い方を「タブレット」に記録し、教科別の学習時間を確認させる。 ○各教科からの課題等を通して、家庭学習の習慣化を図る。 | 家庭学習の習慣化で、 A: 目標以上の成果を上げた。 B: 目標に見合う成果を上げた。 C: 目標に見合う成果に及ばなかった。 | B | B | タブレットの活用増と家庭学習の習慣化が必ずしも一致していない。しかし、家庭学習の充実にはつながっている。 |
| | ○基礎学力の定着 | ○予習・復習とつなげる授業づくりを行い、予習・復習の重要性を周知させる。 ○補習授業、自主的勉強会を充実させる。 ○土曜講座の充実 | 基礎学力の定着が、 A: 目標以上の成果を上げた。 B: 目標に見合う成果を上げた。 C: 目標に見合う成果に及ばなかった。 | B | B | 各教科とも学習内容や課題を工夫し、基礎学力の低着を意識してきている。土曜日授業の実施方法や対象生徒の選定においては、改善しなければならない。 |
| | ○「わかる授業」の研究・推進 | ○学期ごとに授業公開を設定し、相互が自由に参観できるようにする。 ○保護者は、各学期とも参観可とし、2学期は、外部にも公開する。 ○塾関係者の参観も可とする。 | 学校評価アンケートで「授業計画や資料の準備、板書、説明等わかる授業が行われている」「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒が、 A: 75%以上 B: 60%～75% C: 60%未満となる。 | A | B | 昨年度より、格段と良い評価がされているが、目標の75%以上はまだである。授業公開においても、昨年度より1日短縮したが、総数は増加した。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 宗教 |
| 責任者名 | 黄 恵敬 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|--------------|----------------------|---|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| | 「聖書」と「神」を知る。 | 聖書(神)に触れる機会を増やす。 | 礼拝(教会、梅光学院、クラス)のメッセージ、宗教科の授業を受けることによる聖書の理解。 | A | A | 礼拝に真面目に参加して、聖書を読み、暗唱する。クラス礼拝を通して、聖書に深く黙想する機会を設ける。 |
| | 聖書の教えに关心を持つ。 | 聖書が自分の生き方に関係することを学ぶ。 | 聖書的な広い世界観を知って、自分の悩みを乗り越える生きる力を養う。 | B | B | クラスやクラブの人間関係をより円滑にし、いじめの防止などに活かす。 |
| | 聖書の教えを実践する。 | 光の子として歩む。 | 「梅光」においてさまざまなボランティア活動に参加する機会を増やす。 | A | A | サマリアデー募金活動、さまざまな地域のボランティア活動 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|-------|
| 部門名 | 進路指導部 |
| 責任者名 | 中川勝彦 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|--|---|---|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 進路指導 | 6年ないし3年間を通した進路指導全体を意識し、進路サポートの発行、進路ガイドンスの実施により、生徒・保護者に対して、進路に関する情報を適正な時期に提供する。 | 中学、高校を通した進路指導スケジュールを示す。 進路サポートを配布して、進路情報を提供するとともに、進路に関する梅光のガイドンスを示す。 各学年、適切な時期に進路ガイドンスを実施する。 学外で行われる進学合同ガイドンスに参加する。(高Ⅰは10月、高Ⅱは6月) | 重点目標の達成のための具体的方策を実行することで、目標以上の成果を上げた場合はAとする。 重点目標の達成のための具体的方策を実行することで、目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 重点目標の達成のための具体的方策を実行したが、目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | B | B | 年度途中で、指導の流れの見直しを検討したため、ガイドンスは持ち越した。進路ガイドンスは、高Ⅰ全員、高Ⅱ希望者(夢ナビ)の他、明学ティを設けた。保護者へは各社の情報誌を適宜配布し情報の提供に努めた。 |
| | 外部模試の成績を活用し、学力の向上を図る。 | 中学では学力テストを1回実施する。 中学では進研学力推移調査を実施する。(中1・2では3回、中3では1回) 中3では入試プレテストを実施する。 高Ⅰでは進研スタディーサポートを2回、進研模試を3回、小論模試を1回実施する。 高Ⅱでは進研スタディーサポートを2回、進研模試を4回(うち3回は全員が受験)、小論模試を2回実施する。 高Ⅲでは進研スタディーサポートを1回、進研模試を6回(うち2回は全員が受験する)、小論模試を2回実施する。 模試の分析会を行い、教科担当者の教科指導、担任の受験指導の情報を提供する。 | 重点目標の達成のための具体的方策を実行することで、目標以上の成果を上げた場合はAとする。 重点目標の達成のための具体的方策を実行することで、目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 重点目標の達成のための具体的方策を実行したが、目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | B | B | 年度途中で実施する模試の絞り込みを行い、模試計画は年度当初のものと異なった。模試の事前指導や事後指導、結果分析についてはファインシステム、クラッシャー、コンパスなどを利用して教員の指導改善に繋げ生徒に還元した。 |
| | 個々の生徒の学力や進路志望に合わせた受験指導を推進し、志望実現に向けて努力させる。 | 中3では夏期休業中に進学課外を実施する。 高校では朝学運動課外を実施する。 高校では夏期休業中に課外授業を実施する。 高Ⅱ-Aを対象に夏期特別授業を実施する。 高Ⅲを対象に小論文指導を実施する。 個別の受験課外を実施する。 スタディールームを有効に活用し、個別指導を充実させる。 | 重点目標の達成のための具体的方策を実行することで、目標以上の成果を上げた場合はAとする。 重点目標の達成のための具体的方策を実行することで、目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 重点目標の達成のための具体的方策を実行したが、目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | B | B | 朝課外以外はほぼ達成できた。一般試験で最後まで受験勉強に取り組んだ生徒もいたが、より多くの生徒が目標を達成できるようにより細かな指導を模索する必要がある。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|----------|
| 部門名 | 生徒(生徒指導) |
| 責任者名 | 神谷 健 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|--------------|--|---|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 生徒指導 | 授業第一 | <ul style="list-style-type: none"> ・「学ぶ力」を伸ばす指導力の教員育成 ・生徒を集中させる指導力 ・授業の中で規律を学ばせる指導力 ・教員の意識改革 | <p>A: 目標以上の成果を上げた。</p> <p>B: 目標に見合う成果を上げた。</p> <p>C: 目標に見合う成果に及ばなかった。</p> | B | B | 生徒の意識向上よりも教員の意識向上に時間と労力が多くかかりました。授業の中で教員の指導力を向上させることが一番重要な課題になってくると考えます。そのためには、授業での教員の指導力を査定することで、教員間での共有が必要になってきます。 |
| | ルーズな遅刻・欠席の指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・遅刻の意味をしっかりと指導する力 ・欠席理由を考えさせる ・皆勤の重要性を教える | <p>A: 目標以上の成果を上げた。</p> <p>B: 目標に見合う成果を上げた。</p> <p>C: 目標に見合う成果に及ばなかった。</p> | B | B | 担任の指導力に差があるため、遅刻、欠席にこだわる教員と放置する教員に分かれている。むしろ、放置している教員のほうが多い状況である。 |
| | 挨拶、清掃の大切さ | <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶の大切さを教える事で素直な心をつくる ・ゴミ箱を校舎内に設置せずに家庭に持ち帰らせていている。 ・清掃時間、区域の変更が必要 | <p>A: 目標以上の成果を上げた。</p> <p>B: 目標に見合う成果を上げた。</p> <p>C: 目標に見合う成果に及ばなかった。</p> | B | B | 職員室の生徒の入室での挨拶を徹底させる指導を教員に呼びかけることをした。その結果、教員側に意識の向上が見られた。そのようなことから少しずつでも、教員の意識レベルを上げていきたい。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|---------|
| 部門名 | 生徒(生徒会) |
| 責任者名 | 林 久代 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|----------------|--|--|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 生徒会 | 委員会活動によるより良い学校 | ・挨拶運動など元気な学校づくり ・学期に2回の専門委員会の開催 ・各クラス委員との連携・取り組み | A 目標以上の成果をあげた B 目標に見合う成果をあげた C 目標に見合う成果に及ばなかった | B | B | ・挨拶運動では大きな成果を上げ生徒たちに活力が出てきた。 |
| | 生徒の主体的活動による学校行 | ・学校行事(生徒会オリエンテーション、梅光祭・体育祭)の立案・計画・実施 ・学校紹介の立案・計画・実施 ・生徒総会による生徒の意見の反映 | A 目標以上の成果をあげた B 目標に見合う成果をあげた C 目標に見合う成果に及ばなかった | B | B | ・高校の生徒会については、生徒が積極的に動けるような指導が身についてきましたが、中学生徒会においては、中高の連携が難しく、育成できていない状況がある。 |
| | 部活動やボランティア活動の活 | ・部活動規定の整備 ・運動部の改革 ・ボランティア活動の奨励 | A 目標以上の成果をあげた B 目標に見合う成果をあげた C 目標に見合う成果に及ばなかった | B | C | ・運動部の活性化については、大きな課題を抱えている状況である。改善策としては参加、出席状況がゆるいため、本来の運動部としての活動ができるいない状態であることが原因であると考えられます。よって、平日は生徒の習い事や塾を優先している状況なので、部活動がメインになる参加姿勢を確立することに規定を変更することである。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|--------|
| 部門名 | 教育相談 |
| 責任者名 | 村田 晃太郎 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|---------|---|--|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 教育相談 | 校内支援の確立 | 1. 校内支援の流れの作成 2. 年間計画の流れの作成 3. 教育相談コーディネーターの充足 4. 校内研修の実現 | A: 教育相談の支援に60%の生徒・保護者が満足している B: 教育相談の支援に40%の生徒・保護者が満足している C: 教育相談の支援に20%の生徒・保護者が満足している | A | A | 学校評価アンケートにおいて、高校生を除いた区分において、70%を超える結果を得ることが出来た。高校生においても、65%程度でいずれも昨年度を超える評価をいただき、教育相談の校内体制が更に充実してきていると受け取れる。 |
| | 教育相談の充実 | 1. 不登校への対応の体系化 2. フローチャートの作成と実施 3. 部会による情報と対応の継続 4. スクールカウンセラーによる外部支援の継続 | A: 教育相談の支援に60%の生徒・保護者が満足している B: 教育相談の支援に40%の生徒・保護者が満足している C: 教育相談の支援に20%の生徒・保護者が満足している | A | B | 学校評価アンケート結果は、前述のとおりである。夏に作成した「教育相談校内支援のためのガイドブック」をもとに充実化を図ったが、教職員全体への浸透には、時間がかかりそうである。岡村先生のサポートについても学年によって温度差を感じた。 |
| | 特別支援の確立 | 1. 特別支援の対応の体系化 2. フローチャートの作成と実施 3. 支援の実施と経過の観察 4. 発達心理士による外部支援の継続 | A: 教育相談の支援に60%の生徒・保護者が満足している B: 教育相談の支援に40%の生徒・保護者が満足している C: 教育相談の支援に20%の生徒・保護者が満足している | A | A | 外部支援として発達心理士の先生の協力、特別支援学校との連携を得ることができることは、県内私立中学・高等学校の中でも特に充実した体制といえる。的確なアドバイスをいただきながら、さらに対応に心がけたい。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 広報 |
| 責任者名 | 牟田鉄平 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|---------------------------|--|----------------------|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 広報 | ・入学者数の増加 | ・OSの回数、内容の充実 ・小、中学校、学習塾への積極的な広報活動 | 昨年度比入学者数の増加 | B | C | 入学者数の減少 特に高校募集が顕著 市場のニーズに対応できず |
| | ・受験者数の増加 | ・公立受験の判断基準になるような入試設定 ・受験エリアの拡大 ・理数系教科についての説明 | 昨年度比受験者数の増加 | B | C | 受験者数の減少 特に高校募集が顕著 受験エリアの拡大失敗 |
| | ・OS参加者数の増加 ・梅光のイメージアップ | ・体験型のイベント、ノベルティグッズの充実 ・教員、梅先生のOSへの参加 ・学校生活、ICT、Kさんを紹介するOS用動画 | 昨年度比参加者数の増加 アンケート | B | C | OS参加者数の減少 ただし、OS・イベントのリピート率は例年並みかそれ以上 頭数の増加が目標 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 国語科 |
| 責任者名 | 河野優子 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|-----------|----------------|---|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 国語科 | 「読む」ことの育成 | 「読書」の機会を増やす。 | 読書感想文や読書週間などの啓発 | B | B | 読書週間時期は体育祭や中間試験その他の学校行事と重なることで実践が十分とはいえないかった。 |
| | 「書く」ことの育成 | 「書く」機会を増やす | 読書感想文・各種文学作品への6学年通じたコンクールの応募を推進する | A | A | 様々なコンクールに応募して、各種の賞を個人や学校団体で受賞した。 |
| | 「話す」ことの育成 | 人前で「話す」機会を増やす。 | スピーチやプレゼンテーションの機会を国語の授業中に増やすのみでなく、授業中のアクティブラーニングを行うことで話す機会を多く与えることができる。 | A | A | 国語科教員全員が自分の授業内でICTや教材研究を良く行い、実践に努めた。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|----------|
| 部門名 | 社会科/地歴公民 |
| 責任者名 | 坂本 博一 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|---|---|--|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 社会 | 【教科研究】 基礎学力を定着させる指導法の工夫 大学入試問題の研究 教材研究(ICTを活用など) | 小テストや学習プリントの作成 板書の工夫 入試過去問の研究 アクティブラーニングの研究 | 目標以上の成果を上げた場合はAとする。 目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | B | B | 基礎学力を定着させる指導は、各教員がそれぞれ工夫した。小テストやプリントは科目によりことなるが、必要に応じて実施し、意図した範囲内で成果を得た。 アクティブラーニングについてはICTの活用とともに、教員研究をきっかけに、急速に取り組むようになった。十二分の成果を得たが、主に3学期に限定されるので、評価は「B」となった。 |
| | 【授業実践】 生徒を引き付ける指導方法の実践 受験学力の向上 ICTを活用 | 生徒を引き付け、集中させる発問や視点の提供 夏期課外、放課後課外の実施 アクティブラーニングの試行 | 目標以上の成果を上げた場合はAとする。 目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | A | B | それぞれの授業でわかりやすい授業を心掛けた。目標に掲げた成果は得た。 主に高3を対象に課外を実施し、受験指導を行い、良い結果を得た。 アクティブラーニングについてはICTの活用とともに、各教員が積極的に取り組んだ。 |
| | 【教科会】 教員間の指導方法、授業技術の共有 入試問題作成の協力、研究 教科内の事務の役割分担 | 授業の相互見学 教員間のテスト実施 入試作問検討会の実施 | 目標以上の成果を上げた場合はAとする。 目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | B | B | 相互に授業見学は行った。 大学入試問題に取り組んだ。 入試作問に当たっては、社会科全教員で検討を重ね、良問を作ることができた。ただ、難易度が少し高かった。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 数学科 |
| 責任者名 | 吉村武志 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|-------------------|--|---|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 数学 | 分からぬを持ち越させない授業の展開 | ○小テストを行って、生徒の理解度を把握する。 ○小テストの結果をもとに授業展開を工夫する。 ○分かっていない生徒には補習を行う。 | A:目標以上の成果を上げた。 B:目標に見合う成果を上げた。 C:目標に見合う成果に及ばなかった。 | A | A | ・小テストを頻繁に行い、生徒の理解度の確認に努めた。 ・小テストの結果を元に放課後や土曜日に補習を行い、学力の底上げに努めた。 |
| | 計算能力の育成 | ○計算の練習量を増やす。 ○小テストで計算能力の確認をする。 ○放課後や土曜日を利用して、補習授業を行い、計算能力の向上を図る。 | A:目標以上の成果を上げた。 B:目標に見合う成果を上げた。 C:目標に見合う成果に及ばなかった。 | A | B | ・週末プリントなどを活用し、生徒の計算量を増やすように努めた。・土曜日や放課後に補習を行い、分からぬ生徒の計算力向上に努めた。 |
| | 応用力の育成 | ○放課後や土曜日を利用して、補習授業や質問会などを行う。 ○進研模試の問題解説を行う。 | A:目標以上の成果を上げた。 B:目標に見合う成果を上げた。 C:目標に見合う成果に及ばなかった。 | B | B | ・何回か進研模試の問題解説の勉強会を行なったが、他の行事とぶつかって参加者が少なく、思ったほどの成果をあげることができなかつた。 |
| | タブレットを活用する。 | ○タブレットの活用方法を研究する。 ○タブレットの活用方法の研修会を教科で開催する。 | A:目標以上の成果を上げた。 B:目標に見合う成果を上げた。 C:目標に見合う成果に及ばなかった。 | A | B | ・ロイロノートを中心にタブレットを授業に活用している。 ・教科内でもタブレットをどのように使っているか話をしたり、分からぬことはお互いに教えあつている。 ・生徒は興味を持って、授業に臨んでいるが、あまり成績には反映できていない。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 理科 |
| 責任者名 | 中塚聖治 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|-------------|---------------------------------|--------------------|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 理科 | 分かりやすい授業の展開 | ○授業内容の展開と板書を工夫する。 | A 目標以上の成果を上げた。 | B | B | 授業アンケート等を参考にし、授業の振り返りを行って授業の質の向上を図った。演習やタブレットを利用することにより、学習内容の確認と定着を行ったが、今後さらに基礎力の向上が望まれる。ICTの活用については、どのようにして用いるのが効果的であるか試行中ではあるが、今後さらに内容の充実を図っていきたい。 |
| | | ○確認演習により、基礎学力の定着を図る。 | B 目標に見合う成果を上げた。 | | | |
| | | ○タブレットの活用を有効に行う。 | C 目標に見合う成果に及ばなかった。 | | | |
| | 実験・観察の充実 | ○演示実験を含めた実験・観察を行い、授業内容を深めさせる。 | A 目標以上の成果を上げた。 | B | B | 理審により多くの実験器具を導入し、様々な実験が行えるような環境整備を進めることができた。実験や観察の機会も増えていく傾向にあり、考える力と行う力を少しづつ高めることができた。今後さらに論理的な思考を高めることができるよう工夫していくことが課題である。 |
| | | ○実技能力を高める。 | B 目標に見合う成果を上げた。 | | | |
| | 応用力の育成 | ○演示実験を含めた実験・観察を通して、考える力を育てる。 | C 目標に見合う成果に及ばなかった。 | | | |
| | | ○問題集や大学の過去問などの演習により応用力を身につけさせる。 | A 目標以上の成果を上げた。 | B | B | 個別に問題演習や課外授業により、理解力の強化と応用力を高めていくことができた。しかし、全体としての理解力という点ではまだ十分とはいえず、理科への興味関心をさらに高めていき、基礎力を向上させていくことで応用力の強化を図ることが必要である。 |
| | | ○課外授業により、理解力の強化を図る。 | B 目標に見合う成果を上げた。 | | | |
| | | | C 目標に見合う成果に及ばなかった。 | | | |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 保健体育 |
| 責任者名 | 神谷 健 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|--------------------------------|--|--|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 保健体育 | 実技指導のレベルを向上させる(運動が苦手な生徒への指導など) | ・資料作成より研修会をする。 ・研究授業の充実 ・シラバスの整理 | A: 目標以上の成果を上げた。 B: 目標に見合う成果を上げた。 C: 目標に見合う成果に及ばなかった。 | B | B | 体育科教員に指導マニュアルを資料により説明することから始め、授業内の共有を目的に伝授していった結果、3名の体育科教員への影響はあったようだ。 |
| | 保健分野の指導力を向上させる(保健の重要性) | ・生涯体育の重要性を学ぶ。 ・「心の健康」「身体の健康」を修得させる。 ・確かな性教育の完成 | A: 目標以上の成果を上げた。 B: 目標に見合う成果を上げた。 C: 目標に見合う成果に及ばなかった。 | B | B | 体育科教員の定期考查での「保健分野」の問題のチェックをすることで、保健分野の新しい指導法や認識を高めてもらった。 |
| | 生徒の安全を重視した授業内容を完成させる。 | ・熱中症対策の完成 ・担任、保健室との連携 ・常に安全管理の確認をしながら授業を行うこと。 | A: 目標以上の成果を上げた。 B: 目標に見合う成果を上げた。 C: 目標に見合う成果に及ばなかった。 | B | B | あらゆる分野での安全管理を資料を使って、保健体育科の先生方に伝えた。特に昨今の異常気象から来る熱中症対策については、しっかりと認識を深めていただいた。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|---------------|
| 部門名 | 音楽科/音楽・芸術(音楽) |
| 責任者名 | 林 久代 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|--|---|--|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 音楽 | 主体的な音楽活動を通して、音楽を愛好する心情を育てる。 | ・基本的な音楽知識の習得 ・主体的に歌唱、器楽をしようとする態度の育成 ・鑑賞、ワークシートの活用 | ※基本的な音楽知識を習得したうえで A:80%の生徒が主体的に音楽活動に取り組もうとする B:50%の生徒が主体的に音楽活動に取り組もうとする C:50%以上の生徒が主体的に音楽活動に取り組めていない | A | A | 系統だった授業での実技指導で、基礎力の定着が十分に図れ、音楽活動が学校生活に生かされている。男子生徒の編成への対応は今後の課題として残る。 |
| | 主体的な音楽活動を通して、音楽活動で豊かな感性を育む。 | ・基本的な音楽知識の習得 ・主体的に歌唱、器楽をしようとする態度の育成 ・鑑賞、ワークシートの活用 | ※基本的な音楽知識を習得したうえで A:80%の生徒が自分なりの自己表現をもって音楽活動に取り組もうとする B:50%の生徒が自分なりの自己表現をもって音楽活動に取り組もうとする C:50%以上の生徒が自分なりの自己表現をもって音楽活動に取り組めていない | A | A | しっかりと基礎に立ったうえで、感情移入を伴うより高度な音楽表現を求めようとする意識が高まっている。 |
| | 主体的な音楽活動を通して、音楽活動で豊かな感性を育む。さらに、専門性を高め、将来の音楽活動の礎を作り上げる。 | ・音楽知識の習得 ・演奏活動を中心とした授業展開 ・入試問題への取り組み | A:80%の生徒が各自の進路に必要な音楽知識を習得する B:50%の生徒が各自の進路に必要な音楽知識を習得する C:50%以上の生徒が各自の進路に必要な音楽知識を習得できない | A | A | 安定した知識習得ができる。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|-----------|
| 部門名 | 美術・芸術(美術) |
| 責任者名 | 林 武 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------------|---------------------------------------|---|--|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 美術科・ 芸術(美 術) | ○美術の創造活動の喜びを味わう。(中学) | ○作品制作 (中1:マスク・木版画など)、 (中2:ドアノブプレート、想像画など)、 (中3:木彫ブックエンド・ステンシル版画など)を通じて、丁寧さと根気強さと完成する喜びを体験する。 | 各学年の作品が期限内に完成了した作品が、 A:9割以上の提出 B:7割以上の提出 C:7割未満の提出となる。 | A | A | 提出については、細やかな声かけを行なった結果、ほとんどの生徒が期限内提出することができた。中学校の授業の中の実技科目として、十分な活動ができた。 |
| | ○美術を愛好する心情を育てる。(中学) | ○色の三要素や明度、彩度を理解する。 ○有名画家の作品を鑑賞し、色彩構成を学ぶ。 | 定期テストで、色彩などの美術に関する知識の習得が A:目標以上の成果を上げた。 B:目標に見合う成果を上げた。 C:目標に見合う成果に及ばなかった。 | A | B | 定期試験の結果から判断すると、色彩などの知識は大体の生徒が理解していると思われる。また、現在のところ不十分ではあるが、タブレット活動にも積極的に取り組む姿勢をもつて授業を行なうことができた。 |
| | ○美的体験を豊かにし、将来にわたり美術を愛好する心情を育てる。(高等学校) | ○作品制作(静物デッサン・ステンシル版画・貼り絵など)を通じて、自己を見つめ、自然や美術作品に感動する。 ○美的感覚や価値観を日常生活の中で、主体的に表現できる。 | アンケート等を通して、将来にわたり美術を愛好する心情を育てることが A:目標以上の成果を上げた。 B:目標に見合う成果を上げた。 C:目標に見合う成果に及ばなかった。 | A | B | いろいろな作品展に応募し、作品制作を通じて自己表現をすることができた。不登校気味の生徒も自らのベースで活動できたようである。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|-----------|
| 部門名 | 外国語(英語) |
| 責任者名 | 中川勝彦・安海和枝 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|--|--|--|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 英語 | 中学校においては、英語によるコミュニケーション力の基礎形成を図る | 4技能をバランスよく形成させる良質の英語を大量に経験させる検定教科書と洋書テキストの併用 phonix重視 activityを多用する speaking test実施 多読教材に親しませる(Mreader) Word Achievement Testによる語彙力形成 適宜、output活動を取り入れる(speech, skit, presentation etc) | 重点目標の達成のための具体的な方策を実行することで、目標以上の成果を上げた場合はAとする。 重点目標の達成のための具体的な方策を実行することで、目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 重点目標の達成のための具体的な方策を実行したが、目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | A | B | 各教科担当が役割を分担しバランスのよい指導をすることができた。特に英検において、受験者・合格者ともに大きな伸びがあり、一定の成果を上げることができた。 |
| | 高校βコース、音楽科の生徒には、基礎的な英語コミュニケーション力を習得させる | 4技能を統合的に形成させる良質の英語を大量に経験させる検定教科書と洋書テキストの併用 phonix重視 activityを多用する speaking test実施 多読教材に親しませる(Mreader) Word Achievement Testによる語彙力形成 適宜、output活動を取り入れる(speech, skit, presentation etc) 課外等を活用して、諸外部資格・大学入試に対応する学力をつける | 重点目標の達成のための具体的な方策を実行することで、目標以上の成果を上げた場合はAとする。 重点目標の達成のための具体的な方策を実行することで、目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 重点目標の達成のための具体的な方策を実行したが、目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | A | B | 各教科担当が役割を分担しバランスのよい指導をすることができた。特に英検において、受験者・合格者ともに大きな伸びがあり、一定の成果を上げることができた。 |
| | 高校αコースの生徒には、中級レベルの英語コミュニケーション力を習得させ、難関入試に対応していく学力を身につけさせる。 | 4技能を統合的に形成させる良質の英語を大量に経験させる検定教科書と洋書テキストの併用 phonix重視 activityを多用する speaking test実施 多読教材に親しませる(Mreader) Word Achievement Testによる語彙力形成 適宜、output活動を取り入れる(speech, skit, presentation etc) 課外・特別授業等を活用して、高度な外部資格・難関大学入試に対応でき学力を身につけさせる | 重点目標の達成のための具体的な方策を実行することで、目標以上の成果を上げた場合はAとする。 重点目標の達成のための具体的な方策を実行することで、目標に見合う成果を上げた場合はBとする。 重点目標の達成のための具体的な方策を実行したが、目標に見合う成果に及ばなかった場合はCとする。 | B | B | 各教科担当が役割を分担しバランスのよい指導をすることができた。特に英検において、受験者・合格者ともに大きな伸びがあり、一定の成果を上げることができた。一般入試の受験者が少なかったため、難関入試に対応できる学力を十分に養成できたという判断はできない。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|-----------|
| 部門名 | 技術・家庭/家庭科 |
| 責任者名 | 村田 晃太郎 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|---------------|--|---|---|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 家庭 (技術・家庭) | 中学校において、生活に必要な基礎的・基本的な知識及び、技術の習得をめざす。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分と家族とのかかわりに关心をもち家族の重要性と、異年齢の幼児とふれあい、幼児期の遊びを体験する。 ・布を用いた物の製作を通して、技術を得させる。 ・中学生に必要な栄養の取り方、献立の作成、食生活の自立に向けた実践をする。 ・技術分野では、木材を使った「ものづくり」、身近なコンピュータの活用、工具の異本的な使い方を習得させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・幼児の発達と生活の特徴を知り、幼児とコミュニケーションがとれる。 ・ミシンでの基本的な使い方、縫い方、裁縫の基本的な縫い方ができる。 ・5大栄養素の働きや、特徴を理解する。 ・基礎的・基本的な調理操作ができる。 ・木工具、電気工具の基本的な使い方ができる。 ・Word、Excelで簡単な文章や表を作成することができる。 | B | B | <p>幼児とのコミュニケーションや食物などはスムーズに授業が進み生徒も理解し、生活にも今後役立てほしい。</p> <p>技術の面では、ミシンの基本縫い、コンピュータ、木工、電気など、個人差が大きく出て、全員の技術習得が出来なかった。</p> <p>少しでも、多く習得出来るように工夫した授業をやっていきたい。</p> |
| | 高校αコースの生徒には、人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させ、生活に必要な知識と技術を取得させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・被服の機能と着装、及び被服の管理に関する知識と技術を習得させ、高校生の着装に対する関心を引き出す。 ・被服の実習としては、エプロンを作製し、基本縫いやミシン縫いで技術を習得させる。 ・食事の役割や栄養素の種類と機能についての中学校での学習を踏まえ、青年期と家族の各ライフステージの栄養的な特徴について理解させる。 ・現代の子どもや子育て家庭を取り巻く環境の問題について理解させる。 ・家庭経済の現状、社会の変化に伴う消費構造の変化や消費行動の多様化などの現状や課題について認識させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・着用目的に応じて健康で快適な被服の選択と着装ができる。 ・縫い線どおりに奇麗に縫えること、基本縫い、まつり縫い、ボタン付けなどが一人でできる。 ・日常用いられる主な食品を取り上げ、食品の栄養的特質と調理上の性質を理解する。 ・調理実習から、安全や衛生面、配膳、食事のマナーを身につけ、日常生活で実践できる。 ・子どもを生み育てることの重要な役割に気づくことができる。 ・生涯を見通した経済の管理や計画、家計の構造ができる。 | B | B | <p>天候や学校行事により、授業時数に差が出てきた。限られた時間に知識と技術を修得させることは大変な苦労を備う。</p> <p>少しでも効果が上がるよう、教材研究を工夫し、生徒の生活に役立つ授業をしたい。</p> |
| | 高校βコースの生徒には、人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させ、生活に必要な知識と技術を取得させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・被服の機能と着装、及び被服の管理に関する知識と技術を習得させ、高校生の着装に対する関心を引き出す。 ・被服の実習としては、エプロンを作製し、基本縫いやミシン縫いで技術を習得させる。 ・食事の役割や栄養素の種類と機能についての中学校での学習を踏まえ、青年期と家族の各ライフステージの栄養的な特徴について理解させる。 ・現代の子どもや子育て家庭を取り巻く環境の問題について理解させる。 ・家庭経済の現状、社会の変化に伴う消費構造の変化や消費行動の多様化などの現状や課題について認識させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・着用目的に応じて健康で快適な被服の選択と着装ができる。 ・縫い線どおりに奇麗に縫えること、基本縫い、まつり縫い、ボタン付けなどが一人でできる。 ・日常用いられる主な食品を取り上げ、食品の栄養的特質と調理上の性質を理解する。 ・調理実習から、安全や衛生面、配膳、食事のマナーを身につけ、日常生活で実践できる。 ・子どもを生み育てることの重要な役割に気づくことができる。 ・生涯を見通した経済の管理や計画、家計の構造ができる。 | B | B | <p>B天候や学校行事により、授業時数に差が出てきた。限られた時間に知識と技術を修得させることは大変な苦労を備う。</p> <p>少しでも効果が上がるよう、教材研究を工夫し、生徒の生活に役立つ授業をしたい。</p> |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 情報科 |
| 責任者名 | 吉村武志 |

| 学校評価における部門評価 | | | | | | |
|--------------|-----------------|--|---|-----|-----|--|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 情報 | 情報モラル教育の充実。 | ○ニュースなど身近な話題で情報モラルに関係したものがあれば、随時生徒に提供していく。○生徒同士の話し合いを通して、情報モラルについての理解を深めさせる。 | A:目標以上の成果を上げた。 B:目標に見合う成果を上げた。 C:目標に見合う成果に及ばなかった。 | A | B | 実際に話題になったSNSや知的財産に関するトラブルや事件を取り上げ、生徒同士で問題点や解決策を考えさせた。その結果、情報社会で起こるさまざまな問題を、身近なものととらえ、情報モラルについての理解を深めることができた。 |
| | プレゼンテーション能力の向上。 | ○実習を通して、プレゼンテーション能力の向上を図る。 | A:目標以上の成果を上げた。 B:目標に見合う成果を上げた。 C:目標に見合う成果に及ばなかった。 | A | A | keynoteを活用し、生徒全員がプレゼンテーションを行った。プレゼンの内容や発表方法などは生徒同士で評価させた。生徒全員が、効果的なプレゼンを真剣に考え、指導した以上の機能を利用したり、発表方法のさまざまな工夫が見られた。 |

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2016年度

| | |
|------|------|
| 部門名 | 宗教 |
| 責任者名 | 黄 恵敬 |

| まだ評価におりる部門評価 | | | | | | |
|--------------|----------------------|--|--|-----|-----|---|
| 評価領域 | 重点目標 | 具体的方策 | 達成基準 | 実行度 | 達成度 | 重点目標の達成状況の診断・分析 |
| 宗教 | 聖書とイエス・キリストへの理解 | <ul style="list-style-type: none"> ・聖書の中心テーマである福音を理解する。 ・聖書を読み、その主人公であるイエス・キリストを理解する。 ・聖書の考え方方が、いかに人々の人生に影響をもたらしたかを通し、より生徒の歩みに則したものとする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業で福音について説明し、各自が理解した福音を文書で書く。 ・聖書の通説を勧めて聖書に関心を設ける。 | A | B | 授業でスマール・グループで話し合ったり、期末試験で理解した福音とイエス・キリストについて書かせる。 |
| | チャペル、教会出席の関心、意欲を高める。 | <ul style="list-style-type: none"> ・教会出席ノートを活用し、教会出席しての感想、疑問等を抽出す。 ・チャペルにおいて生徒が話す機会を増やす。 | 教会出席ノートで、教会に学期ごとに2回以上出席しレポートを書く。 | A | A | 学期ごとに2回以上教会の礼拝に参加し内容を教会出席ノートに書く。 |
| | 道徳の教科化に対する対応 | ・宗教の道徳「教科化」に向かっていかに対応するか審議を深める。 | 「梅光」において道徳をどう教えるか、管理職との連携、協議を深め、立ち位置を明瞭にしていく。 | B | B | 宗教の道徳「教科化」について、話し合いが持たれ、管理職との連携、協議を深めた。さらに、今後一層の進展に努めていく。 |

6 学校評価総括(取組の成果と課題)

新たな方式で学校評価を実施して、2年目。まだまだ不十分な点もあったが、昨年度と比較すると方針や実行度に結果が見られる部門が増えてきた。新たな方策の中、学年、校務分掌、教科など連絡、コミュニケーションもとれるようになり、これが成果としてあらわれてきたものと思われる。全国でも数少ない協定校の締結。英語授業の改善による英語技能検定への成果。新たな留学制度、ICT教育・研修の更なる充実化。など、顕著な結果が現れ始めていると感じる。しかし、学校改革の中、まだまだ課題も山積しており、これを再度洗い出すことにより、来年度に向けての課題と新たな取り組みとしたい。それぞれの教師が学校評価に対する意識が深まることに期待したい。その反面、今年度も「学校関係者評価」も出来なかった。努力義務と言え、次年度は学校の関係者に中に入っていただいて、「学校関係者評価」是非行いたい。

7 次年度への改善策

今年度の学校目標「変わらぬ建学の精神、変わる梅光学院」をスローガンに、学校改革に取り組んできた。先に述べたように顕著な成果も見られている。しかし、山積した課題を一つ一つ解決していくには学校、生徒、家庭(保護者)の理解・協力の上での新たな取り組み、新たな学校教育目標及びスローガンの設定が必要不可欠と考える。そして私学として「選ばれる学校」とすべく学校改革を実現・成功への方向性を示すような取組を行っていきたい。そのためには全教職員が力を合わせていかなければならぬ。現場の教師が「授業をきちんと行うこと。ホームルーム活動をきちんと出来ること。保護者と信頼関係を持つこと。」このことに今年度同様重点項目とし、次年度の学校改革を推進していく。そのために、学校が進むべく道筋を示すべく校長がそれに似合った「学校経営計画」を示し、その方向性を確認し全教職員がベクトルを一致させて学校改革をすることとする。